

編集後記

本号から『白山人類学』は紙媒体への印刷を止め、オンラインでPDFデータのみを公開することとなった。これも時代の趨勢である。紙媒体への印刷は多大な費用がかかるため、会費収入の少ない団体にとっては維持できなくなりつつある。

オンラインジャーナルに特化するという選択は避けられないこととはいえ、これにより学術誌の閲覧状況がいかに変化するのかを考えておくことは、けっして無駄ではないだろう。これまで読者は紙媒体に印刷された冊子が年一回、自動的に送られてきて、物質としての冊子を手に取り、パラパラとページをめくりながら、どのような論文が掲載されているのかを頭の片隅に入れていたことだろう。

この時、多くの読者は関心のあるテーマについてはもちろん熟読していたはずだが、たとえ関心のないテーマであったとしても、どのような人が何を書いていたのかくらいは把握できていたはずだ。このように頭のなかにおぼろげながらインデックス化された情報があり、一方で冊子が読者諸氏の書棚に保管されているという環境こそが、図らずも学問の発展に寄与していた可能性がある。

例えば、何事か考えごとをしている中で自分には関係がないと思っていた論文が突如、必要な情報になることがある。あるいは何となく書棚を眺めて冊子を手に取り、たまたま目に入った論文が、その時、考えて続けたことに何らかのヒントを与えることがある。

人がものを考えるとき、考えごとの直接の

対象とは異なるものに触発されて、創造的な解決方法が偶然にも見つかることがある。こうした創造性を発揮するには、思考を刺激する雑多ものが、自分の日常生活の範囲のなかにちりばめられている必要がある。その時点では関心がないテーマの論文が多数収録されている冊子を自分の書棚に保管しておくことは、この意味で極めて重要だといえる。

オンラインのみの発行では、こうはならない。関心のある論文については直接検索してダウンロードする一方、関心のないものについては検索することがないため、その人にとって存在しないも同然である。ちなみに編集後記をダウンロードしてまで読む奇特な人などほとんどいないだろう。悲しいかなオンライン化によってもっとも読まれなくなるのは、今まさに私が執筆している文章である。

むしろオンライン化にも利点はある。したがって、失われゆくものに対する思慕の念のみを抱くつもりはない。だが、少なくとも今回のオンライン化により、冊子という形態で刊行される学術誌が人間の創造性に対して果たしてきた役割について見つめ直すこととなった。財政的問題を抜きに語ることはできないが、学術誌のオンライン化が学問の発展を妨げることがないように願う。(箕曲在弘)

白山人類学編集委員 Board of Editors

左地亮子	SACHI Ryoko
寺内大左	TERAUCHI Daisuke
長津一史	NAGATSU Kazufumi
松本誠一	MATSUMOTO Seiichi
箕曲在弘	MINOO Arihiro
山本須美子*	YAMAMOTO Sumiko*
	* Chief Editor